

## 幼児の文章理解に及ぼす読みの形式と絵の効果

今井靖親・中村年江

(奈良教育大学心理学教室)

(平成元年4月28日受理)

### 問 題

多くの研究者によって、幼児期からの絵本や童話への接触が、後の読書歴の発達に重要な意味をもつことが指摘されている。書きことばをとおして、物語の世界、あるいは、想像の世界を自分なりに構築した経験が、後に自分の力で読むようになった時の“心の糧”になるのであろう。我々はこのようないわば読みの土壌が、幼児期からの絵本や童話との接触をとおして形成されていく過程を、心理学的に明らかにすることによって、読書—文章を読んで理解する過程—に働いているさまざまなメカニズムの解明に一步近づきうると考えている。

ところで、幼児と絵本との最初の出合いは、幼児自らが絵本の文章を読むという形ではなく、誰かまわりの者から、絵本の文章を読み聞かせてもらうという経験から始まる。このようにして幼児は、絵本の文章を理解し、そこに表現される世界に触れることで、自らの思考や情緒を発達させていくのである。

文章という形で書かれた情報を受容し、理解する過程は、いわば、読みという行為の中核をなすものであり、幼少年教育研究所(1973)の「幼児・児童読書力テスト」や久原・井上・波多野(1974)の「読書力テスト」の例でも明らかなように、読書力や読解力を構成する重要な原因とみなされている。これらのテスト構成を総合して考えてみると、文章の理解は、文章が述べている中心的考え(論旨・要旨・主題など)の把握と、細部の理解から成りたっていると言えよう。

最近、幼児の文章理解に関する心理学的研究も目につくようになったが、その中から、注目すべきものを二、三紹介したい。

内田(1975)は、物語のような意味的展開のある言語材料の情報処理について検討し、これらはまず、聴覚的コード化という処理がなされることによって、構造的把握がなされ、次に意味的コード化という処理を経て十分な理解に至ると仮定した。そこで、文を受容する時に、1文ずつ声を出して復唱する条件(外言化群)と1文ずつ声を出さずに復唱する条件(内言化群)とを設けて実験を行った。その結果、再生テストでは、外言群は形成的側面に優れ、内言群は内容的側面と意味の洗練度において優れていることが明らかになったが、理解テストと予測テストにおいては有意な差が見られなかった。

また、高木・丸野(1979)は、物語理解における先行情報の提示効果を検討し、加算的に与えられる情報の順序提示によって、子ども達は、物語の構造化を把握することが可能であり、この構造化が後続する物語理解における枠組として有効に働くという結果を得ている。

いっぽう、高木・沢田・小林・田代(1975)は、繰り返しの読み聞かせにおける反応分析をもとに、物語絵本が幼児に理解されていく過程について、検討を加えている。彼らは、幼児における物語受容過程の変化を、①場面や部分への興味にとどまり、流れへの理解はできない段階。②いくつかの場面相互の関連がつき始め、次への予想も始まる段階。③物語の流れ全体を理解して

楽しむ段階、の3つを仮定し、実験を行った結果、上記の①の段階から②の段階への移行を確認した。

上で紹介した3つの研究においては、文章はすべて実験者が被験者に読み聞かせるという形式で与えられている点に注目したい。読み聞かせとは、文字を読めない相手に書かれた文、または文章、あるいは物語を主として聴覚的に提示することで、文字言語、音声言語における、それぞれの言語理解の中間に位置するものであると考えられる。

では、幼児に実際に文または文章を読ませることによって、どの程度、内容の理解ができているかを調べた研究があるのだろうか。

国立国語研究所(1972)では、簡単な言語的命令を平仮名書きにした文を幼児に示し、それを読んで指示通り行動できるか否かを基準にして文の理解を調査している。結果を見ると、平仮名が60字程読める者は読みと理解がともなっているが、それ以下の読字力水準の者には誤反応が多かった。

神戸市立教育研究所(1973)では、読字力水準の異なる幼児に同じく平仮名の短い文を読ませた後、質問に答えさせるという方法で文の読みと内容理解の関係を調査している。その結果、やはり読字力水準が高くなるにつれて、短文の内容を理解できる幼児数が多くなることがわかった。上記の2つの研究に照らしてみると、文の内容理解の前提条件の1つとして、使用文字(ここでは平仮名)の大部分の読みを習得していること、特に、特殊音節文字を読めることをあげるのではなかろうか。

次に、今井・今井(1983b)は、読字能力の異なる幼児が能動文・受動文を読む際に、文の理解に相違があるか否か、また、文章を読み聞かせた場合と音読させた場合とでは、文の理解にどのような違いがあるかを2つの実験で検討した。

実験Ⅰでは、カードに書かれた文を被験者に音読させ、その内容を表している絵を選択させた。その結果、読字力水準低群のほうが成績が良く、受動文の理解よりも能動文の理解のほうが良かった。

実験Ⅱでは、読み聞かせ群と音読群に分け、実験Ⅰと同じく絵を選択させる方法を用いて、文の理解度を調べた。その結果、両群の成績に有意差は認められなかった。

上記の3つの研究において、幼児に読ませるために用いた言語材料は、すべて短文であった。このように、従来の研究の中に読字力の十分でない幼児に絵本の文章や物語全体を読ませてその内容の理解度を調べるようなものが見当たらないのは、就学前に、文字を読めない幼児が多数を占めていた過去の時代を考えるならば、決して不思議ではない。しかし、最近では、ほとんどの子どもが平仮名を読み、今井・今井(1983a)の調査結果からも明らかなように、約20%の幼児が片仮名(40~46文字)をも読める状況にある。そこで本研究では、読み聞かせと音読という異なった読みの形式について、幼児における絵本の文章理解を検討することを第1の目的とする。

ところで、文字や文の読みを学習させる場合に絵の対提示が行われることが多い。これは、提示される絵が、学習の動機づけを高め、単語や文の意味理解を促進すると考えられているためである(今井、1979)。幼児における読字学習の研究分野では、既に、Samuels(1967)、杉村(1974)をはじめ、今井(1980、1983、1986)など、絵の対提示効果について、比較的多くの研究が行われている。しかし、文または文章の読みにおいては、Rusted and Coltheart(1979)や佐藤(1979、1980)、今井(1984)などがあるものの、数は非常に限られている。この領域における従来の研究成果をひとことで言うならば、読字学習においては、絵の提示の効果は必ずしも明確ではなく、

文章や物語の読みの場合には絵の提示効果についての究明が、まだほとんど行われていない、といった状態である。

そこで、本研究では、幼児が絵本を読む際に、提示される絵の効果についても合わせて考察することを第2の目的とする。

## 方 法

**実験計画** 2×2の要因計画が用いられた。第1の要因は、読みの形式で、読み聞かせをするか、音読するかであり、第2の要因は、絵の対提示の有・無である。

**被験者** 本実験で用いた材料の絵本を知らない幼稚園年長児72名（男児39名、女児33名）、平均年齢6歳0か月（年齢の範囲：5歳7か月～6歳6か月）である。被験者の要因を統制するために、被験者の読字力についての予備調査を実施した。前期の被験者は、この調査（清音・特殊音節から成る平仮名合計94文字）において、読字量が80%を超えた者である。彼らを次のような4群に配置した。それらは、

(1)読み聞かせ・絵の対提示有り群、(2)読み聞かせ・絵の対提示無し群、(3)音読・絵の対提示有り群、(4)音読・絵の対提示無し群であった。

各群の平均年齢は、(1)から順に、5歳9か月、6歳1か月、6歳1か月、5歳10か月である。

**材料** 学習材料

①伊東三郎再話・堀内誠一画の絵本『くろうまブランキー』（1967年 福音館書店出版）。これは、絵の対提示有り群に対して使用された。この絵本は、全体の物語が9場面から成っていて1場面を描写する絵は、左右見開きすなわち両ページ全体にわたっている。文章は、どの場面においても、絵の端（左上端・右上端・左下端・右上端のいずれか）に平仮名で書かれている（図1）。

②絵の無い本。これは、絵の対提示無し群に対して使用された。①で使用した絵本から挿絵を除去した同型の本を実験用に作成したものである。各場面ごとの文章も、原本と同様の配置にし、使用する文字の大きさ・色（黒色）にも配慮した。

③録音テープ。これは、読み聞かせ群に対して使用された。実験者が予め絵本を朗読し、それをテープに録音したものを使用した。全体の朗読時間は、3分18秒であった。

(2) 理解度テスト項目

12の質問項目（表1）より成る理解度テストを使用した。

**手続き** 実験は、すべて個別に行われた。被験者を部屋に同伴し、机を前にして、実験者の左横に座らせた。学習試行の後、テスト試行が行われた。

(1)学習試行

①読み聞かせ・絵の対提示有り群

「今から、この絵本のお話をテープレコーダーで聞かせるから、ここに書いてある文字を見ながら、よく聞いていてね。その時、絵もよく見ててね。前のページを、絶対に開けないでね。それから、これを読み終わった後、私がお話の内容について質問するので、お話の内容をよく覚えていてね。」という教示を与えて、被験者に録音テープを聞かせた。

②読み聞かせ・絵の対提示無し群

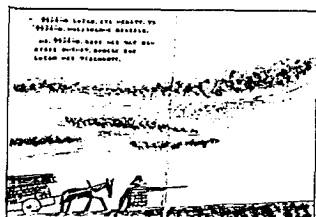
上記の①と同じ教示を与えて、被験者に録音テープを聞かせた。

③音読・絵の対提示有り群

図1. 絵本の内容



第1場面



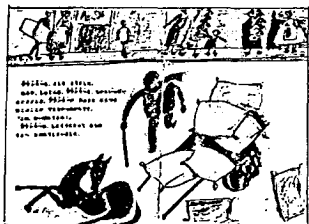
第2場面



第3場面



第4場面



第5場面

- ① はらっぱの まんなかの、ちいさい おひやくしょうの  
ところ、まっくらな こうまが うまれました。  
こうまの なは、ぶらんきー。

- ② ぶらんきーの しゅじんは、とても いじわるです。  
でも、ぶらんきーは、いっしょうけんめいに  
はたらきました。  
いま、ぶらんきーは、おおきな いしを つんだ、  
おもい にぐるまを ひいています。おかねもちに  
なった しゅじんの いえを つくるためなのです。

- ③ りっぱな いえが できました。でも ぶらんきーは  
そとで ねます。しゅじんが ぶらんきーの すむ  
こやを つくって くれなかったのです。  
あめの ふる ときには、ぶらんきーは、きのしたで  
ねます。

- ④ よるに になると、ぶらんきーは、おほしさを  
ながめます。

- ⑤ ぶらんきーも、としを とりました。  
あるひ、しゅじんは、ぶらんきーを、ちからいっぱい  
たたきました。ぶらんきーが おおきな にもつを  
はこぶことが できなかったからです。  
「この、おいぼれうまめ！」  
ぶらんきーは、しにそうになって みちの うえへ  
たおれてしまいました。



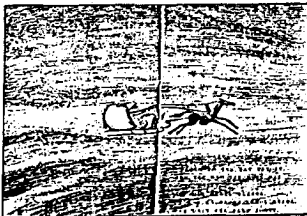
第6場面

- ⑥ そのばんは、ちょうど、くりすますの ばんでした。さんたくろーすが、てんから、そうっと おりてきました。そして、みちの うえに、ちいさな くろいうまが、へたばっているのを みつけました。さんたくろーすは、しずかに うまの くびを なでてやりました。かおを だいて、あたまをおこしてやりました。



第7場面

- ⑦ ぶらんきーは、げんきを だして、たちあがりました。さんたくろーすは、うまに いいました。「おまえは、わたしに ついてこないかな。わたしのそりを、ひっぱるのだよ。おいしいまめも、あたらしい じょうとうの まぐさも あげよう。」ぶらんきーは ゆめを みているような きがしました。



第8場面

- ⑧ さんたくろーすの そりは、ざんで できています。そりは、てんの みちの うえを、ちっとも おとをたてずに すべります。うまの はしる あしおとも きこえません。ぶらんきーは、もう、たたかれる しんぱいも ありません。そらは ひろくて、とても きもちが よいのです。



第9場面

- ⑨ ぶらんきーは、よく はたらいたので、いま、さんたくろーすの あしもとで、ねむる ところです。ぶらんきーは、さんたくろーすの てをなめます。それから しずかに めを つむります。——おやすみ。

「今から、この絵本を出して読んでね。その時、絵もよく見てね。前のページを、絶対に開けないでね。それから、これを読み終わった後、私がお話の内容について質問するので、お話の内容をよく覚えていてね。」という教示を与えて、被験者に絵本を読ませた。

#### ④音読・絵の対提示無し群

上記の③と同じ教示を与えて、被験者に絵のない本を読ませた。

#### (2)テスト試行

表1に示した理解度テストを実施した。たとえば、絵本の第1場面では、『はらっぱのまんなかのちいさいおひやくしょうのところで、まっくろなこうまがうまれました。こうまのなはぶらんきー。』という内容表現に対して、実験者が『ぶらんきーはどこで生まれましたか。』と質問す

る。以下同様に、各項目について質問がなされた。

表1. 理解度テストの内容とその正答

番号	質 問 項 目	正 答
1	ブランキーはどこで生まれましたか。	原っぱのまんなか お百姓さんの所
2	主人はどんな人でしたか。	こわい人 いじわるな人
3	雨が降ったら、ブランキーはどこで寝ましたか。	木の下で
4	夜になるとブランキーは何を眺めましたか。	お星様
5	夜になって、お星様を眺めていた時、ブランキーは、 どのように思ったでしょうか。	一人ぼっちで寂しいなあ と思った
6	年をとったブランキーが大きな荷物を運ぶことができ なかった時、主人はどうしましたか。	力いっぱいたたいた
7	ブランキーは、主人にいじめられた時、どのように思っ たでしょうか。	嫌だと思った 悲しく思った
8	ブランキーが道に倒れたのは、何の晩でしたか。	クリスマスの晩
9	天から降りて来た人は、ブランキーにどのようにしま したか。	やさしくしてあげた 食べ物をあげた
10	ブランキーは、何をひいて空を走りましたか。	そり
11	ブランキーは、クリスマスの晩、どこで寝ましたか。	サンタクロースの家で サンタクロースの足元で
12	サンタクロースが、やさしくしてあげた時、ブランキー はどのように思いましたか。	嬉しく思った 幸せだと思った

## 結 果

### (1)理解度テストの成績

結果の処理は次のように行った。理解度テストにおける各項目の正しい解答に対して1点を与えた。質問項目が12項目あるので、満点は12点となる。

表2. 理解度テストにおける各群の平均得点と標準偏差

		読み聞かせ	音 読	全 体
絵の対提示有り	$\bar{X}$	6.22	4.72	5.47
	SD	2.24	2.16	
絵の対提示無し	$\bar{X}$	4.61	3.28	3.94
	SD	3.01	1.93	
全 体		5.42	4.00	4.71

①表2は、理解度テストにおける各群の平均得点と標準偏差を示したものである。これをもとにして、読みの形式（読み聞かせ・音読）と、絵の対提示の有・無とを被験者間の要因とする、 $2 \times 2$ の分散分析を行った。その結果を示したのが、表3である。読

みの形式の条件の主効果が $F(1, 68)=6.06$ ,  $P<.05$ で、また、絵の対提示条件の主効果が $F(1, 68)=7.04$ ,  $P<.01$ で、それぞれ有意であった。読みの形式と絵の対提示条件との交互作用は有意でなかったが、念のために、単純効果の検定を行ったところ、読み聞かせ・絵有り群と音読・絵無し群の成績の間には、 $P<.001$  ( $t=5.88$ ,  $df=17$ ) で有意差が認められた (図2 参照)。

表3. 表2にもとづく分散分析表

変 動 因	SS	df	MS	F
読みの形式(A)	36.04	1	36.04	6.06*
絵の対提示(B)	41.86	1	41.86	7.04**
A × B	0.13	1	0.13	0.02
誤 差	404.43	68	5.95	
全 体	482.46	71		

\*\*  $P<.01$

\*  $P<.05$

②理解度テストの項目ごとの正答者数と正答率 表4は項目ごとの正答者数と正答率を示したものである。

全体で、正答率が60%を超えたものは、項目3と項目4のみであった。これを、各群について調べてみると、読み聞かせ・絵有り群では、項目2・3・4・6・8・10・11、読み聞かせ・絵無し群では、項目4・8、音読・絵有り群では、項目3・4・10となっている。音読・絵無し群には、正答率が60%を超えた項目はなかった。

逆に、全体で正答率が20%に達してないのは、項目1と項目5であった。これを各群についてみると、読み聞かせ・絵有り群では、項目5のみ、読み聞かせ・絵無し群では、項目1・5、音

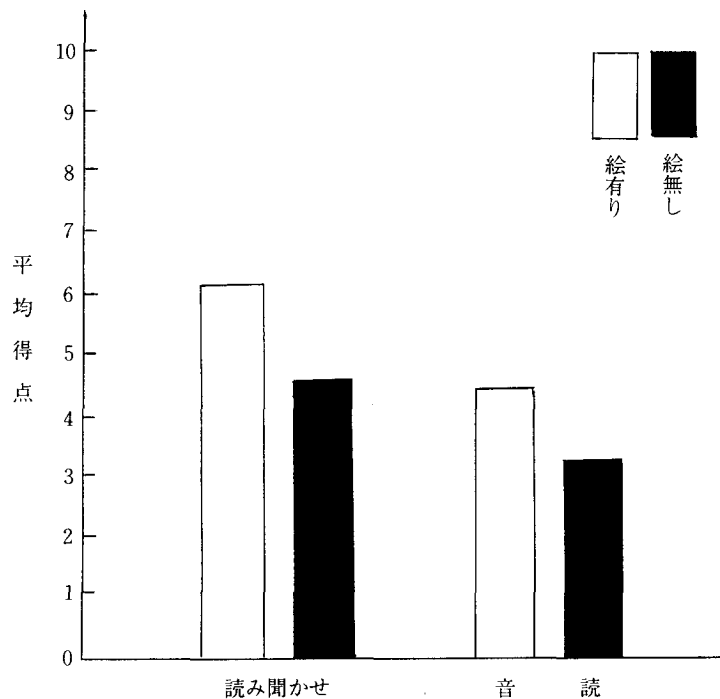


図2. 理解度テストにおける各群の平均得点

表4. 理解度テストの項目ごとの正答者の人数と正答率(%)

群 番号	読み聞かせ・絵有	読み聞かせ・絵無	音読・絵有	音読・絵無	全 体
1	5 <sub>A</sub> (27.8)	1 ( 5.6)	3 (16.7)	0 (0)	9 (12.5)
2	12 (66.7)	7 (38.9)	6 (33.3)	3 (16.7)	28 (38.9)
3	13 (72.2)	9 (50.0)	13 (72.2)	10 (55.6)	45 (62.5)
4	11 (61.1)	13 (72.2)	11 (61.1)	9 (50.0)	44 (61.1)
△5	0 ( 0 )	3 (16.7)	2 (11.1)	2 (11.1)	7 ( 9.7)
6	13 (72.2)	9 (50.0)	7 (38.9)	5 (27.8)	34 (47.2)
△7	4 (22.2)	6 (33.3)	4 (22.2)	4 (22.2)	18 (25.0)
8	15 (83.3)	11 (61.1)	8 (44.4)	3 (16.7)	37 (51.4)
9	10 (55.6)	4 (22.2)	10 (55.6)	7 (38.9)	31 (43.1)
10	13 (72.2)	9 (50.0)	11 (61.1)	10 (55.6)	43 (59.7)
11	11 (61.1)	5 (27.8)	7 (38.9)	0 ( 0 )	23 (31.9)
△12	6 (33.3)	5 (27.8)	2 (11.1)	7 (38.9)	20 (27.8)

注：△印…登場人物の行動・発語の心情をどのように理解しているのかを問う項目

読・絵有り群では、項目1・5・12、音読・絵無し群では、項目1・2・5・8・11となった

次に、「読み聞かせ」群と「音読」群という読みの形式ごとに、絵の有・無によって有意差または有意な傾向の認められる項目を調べてみたところ、「読み聞かせ」群では、項目1 ( $\chi^2=3.12$ ,  $.05 < P < .10$ )、項目2 ( $\chi^2=2.79$ ,  $.05 < P < .10$ )、項目5 ( $\chi^2=3.27$ ,  $.05 < P < .10$ )、項目9 ( $\chi^2=4.21$ ,  $P < .05$ )、項目11 ( $\chi^2=4.05$ ,  $P < .05$ ) の5項目、「音読」群では、項目1 ( $\chi^2=3.27$ ,  $.05 < P < .10$ )、項目11 ( $\chi^2=8.69$ ,  $P < .01$ )、項目12 ( $\chi^2=3.70$ ,  $.05 < P < .10$ ) の3項目であった。

#### (2)読みにおける所要時間

「読み聞かせ」群では、絵の有・無にかかわらず、材料の文章をゆっくりと明瞭に読むための所要時間（テープ録音時間）は、3分18秒であった。「音読」群における所要時間は、絵有り群では平均7分44秒 ( $SD=2.56$ )、絵無し群では平均8分44秒 ( $SD=3.54$ ) であり、両群の間に有意な差は認められなかった。しかし、「読み聞かせ」群と「音読」群の「読み」における所要時間には、有意差が認められた ( $t=11.44$ ,  $df=17$ ,  $P < .001$ )。

## 議 論

本研究の目的は、幼児の絵本の読みにおける文章理解において、読み聞かせと音読の条件を実験的に比較検討するとともに、提示される絵の効果についても合わせて検討することであった。

主な結果は、次のとおりである。

(1)文章理解度の成績を比較すると、「読み聞かせ」群と「音読」群の間には、有意差が認められた。また、絵本の物語場面によって、文章理解度の得点に、高いものと、低いものがあることが認められた。



(2)絵の対提示は、文章の理解に有効であった。また、「読み聞かせ」と「音読」という読みの形式に関係なく、絵本の物語場面によって、絵の対提示の効果に差のあることが認められた。

以上の結果にもとづいて、考察を行う。

まず、結果(1)の「音読」群よりも「読み聞かせ」群のほうが文章理解の成績の良かったことに関しては、次のように考察する。先に述べたように、国立国語研究所(1972)や神戸市立教育研究所(1973)では、読字力水準が高まるにつれて、文の理解の程度が高まっていくという結果を得ている。そこで、本研究においては、読字力が最高のH段階(国立国語研究所 1972における読字力水準A~Hで、特殊音節を含めて全部の文字が読める段階)に相当する被験者を特別に選出して、読み聞かせと音読による文章の理解度を調べた。ところが、全体の平均値は、12点満点の半分にも達していない4.71点であり、音読させた場合の成績は、わずか4点という低さであった。

今井・今井(1983b)は、本実験と同様に、幼児を対象として、文の読み聞かせと、音読による内容理解を比較しているが、読みの形式による成績の差は認められなかった。本実験と異なった結果が生じたのは、彼らでは、言語材料の文がきわめて短く、主語—述語という単純な構造であり、それだけに、意味理解も容易であったからだと考えられる。

このことに関して、高橋・杉岡(1988)は物語の理解の過程を次の2つに分けて考察している。すなわち、①物語のストーリーをどのように理解しているのかという側面と、②登場人物の行動・発話の心情をどのように理解しているのかという側面の2つである。この分類にもとづいて、本実験の理解度テストで測定した各項目内容を調べてみると、項目の5・7・12が上記の②に該当する。それぞれの正答率は、順に、9.70%・25.00%・27.80%であり、12個の質問項目のうち、最も低い得点群に属している。これは、物語に登場する人物の行動の意図や気持ちを正しく説明するという認知的あるいは共感的な理解が困難であるということを明確に示している。

ところで、村田(1972)によれば、一般に聴覚的言語受容(聴取)は、視覚的言語受容(読み)よりも先に発達すると考えられている。確かに、被験者の聴取における理解度が等しいとしても、読みを全く、あるいは、ほとんど習得していない段階にある者に、文章を読ませて比較すれば、当然、読みによる理解度は聴取によるそれよりは低くなると思われる。しかし、本研究で試みたように、被験者が、既に、全部の文字が読めるというような読字力を備えた段階に到達しているならば、また、読みによって受容すべき情報の内容が幼児を対象とした絵本のストーリーというような平易なものであるならば、読みの形式が聴取であっても、音読であっても、受容した内容を同じ程度に理解することができるのではないか。本研究は、その予想のもとに実験計画がたてられた。しかし、上述したとおり、音読という形式による読みにおいて、文章の内容理解度が、きわめて低いという結果が得られた。

念のために、「音読」群の読みにおける平均所要時間を調べてみたところ、8分24秒であった。「読み聞かせ」群においては、大人(実験者)がゆっくりと明瞭に朗読した場合の平均所要時間が3分18秒であるから、両者の差は、4分56秒となる。このように、文章の内容理解度が低く、また、読み自体に長時間を要しているという本研究の結果は、たとえ使用されている文字がほとんど読めるような読字力水準にあっても、多数の文で構成されている物語を自分で音読するという読みの形式は、幼児にとって、きわめて困難な作業であること、それゆえ、言語単位が長大で、統語的、意味的にも難度の高い絵本全体あるいは一つの物語について内容を理解することになれば、読み聞かせという読みの形式のほうが、より効果的であり、妥当であることを示唆し

ている。

次に、結果(2)に関しては、以下のように考察する。

既に述べたように、Rusted and Coltheart (1979) は、被験者の読字力水準の高低に関係なく、対提示される絵が再生を促進することを明らかにしている。また、今井(1984)は、幼児の読字学習において、絵を文字とともに対提示しない場合には、読字力にかかわらず良い成績を示したという結果を得ている。さらに、今井・斎藤(1988)は、幼児が空間的位置関係を把握する際に、提示される絵が促進効果を持つことを見い出している。この結果は、絵が教示の叙述内容を具体的にイメージ化するという情報機能を有するためだと考えられた。

本研究においては、上述したとおり、読字力水準の高い者でも、文章を読む時に絵を対提示したほうが、文章の内容理解の成績が良かった。これを今井(1984)と比較すると、彼の場合、課題は、1つの絵を提示して、それを叙述する短文を読むことであったが、本研究においては、絵本の各場面ごとに1つだけ提示されている挿絵に対して、時に4～5の文から成る文章を読むことが課題であった。さらに、本研究では、単に文章を音読させ、その読みの正確さを査定するのではなく、文章を読んだうえで、内容の理解や把握の程度を査定するものであった。このように本研究では、音読群の課題の難度が高かったために、読字力が高水準の者に対しても、絵のもたらす情報が有効に働いたと考えられる。

なお、佐藤(1979、1980)も幼児に絵本を読み聞かせ、挿絵の効果を検討し、挿絵が無い場合よりも具体的挿絵が有るほうが文章の理解度が高いという結果を得ているが、本研究の結果はこれを支持するものであった。

以上の検討から、読みの課題において、与えられる材料の言語単位が長く、伝達される情報の量や複雑さが増加する場合には、対提示される絵は、文または文章の意味をより明確にし、読解を補助するという情報機能を果たすとともに、読みという行動を活性化し、継続させる動機づけ機能を果していると考えられる。

## 要約と結論

本研究の目的は、幼児の絵本の読みにおける文章理解について、読み聞かせと音読の条件を実験的に比較検討するとともに、提示される絵の効果についても合わせて検討することであった。

被験者は、材料の原作を知らない幼稚園年長児72名であった。彼らは、①読み聞かせ・絵の対提示有り群、②読み聞かせ・絵の対提示無し群、③音読・絵の対提示有り群、④音読・絵の対提示無し群の4群に配置された。

材料は、絵の対提示有り群に対しては、伊東三郎再話・堀内誠一画の絵本『くろうまブランキー』(1967年 福音館書店出版)を使用した。絵の対提示無し群には、上述の絵本から挿絵を除去した同型の本を使用した。読み聞かせ群には、実験者が予め絵本を朗読し、それをテープに録音したものをを使用した。

学習試行は、①群では、絵本を与え、文章を黙読させ、絵を見させると同時に、録音テープを聞かせた。②群では、絵の無い本を与え、文章を黙読させると同時に、録音テープを聞かせた。③群では、絵本を与え、絵を見させながら、文章を音読させた。④群では、絵の無い本を与え、文章を音読させた。テスト試行では、物語の内容を問う理解度テストを行った。

主な結果は、次のとおりである。①文章理解度の成績では、「読み聞かせ」群と「音読」群の

間に、有意差が認められた。また、絵本の場面によって文章理解の容易なものと困難なものがあることが認められた。②絵の対提示は、文章の理解に有効であった。また、「読み聞かせ」と「音読」という読みの形式に関係なく、絵本の物語場面によって、絵の対提示の効果に差のあることが認められた。

前記の結果は、①幼児が絵本の文章内容を理解する際に、幼児自身が音読するよりも、他者から読み聞かされるほうが効果があること、②幼児が、絵本の文章内容を理解する際に、対提示された絵は効果があることを示唆している。

以上の本研究の結果と考察から、幼児が絵本の文章内容を理解する際には、文章とともに絵が提示されたものを、他者から読み聞かせたほうが、幼児自身に音読させるよりも、効果のあることが明らかにされた。

## 引用文献

- 今井靖親 1979 幼児の読字学習における指導法の検討——片仮名と漢字の学習難易度と絵の呈示効果——  
読書科学, 23, 97-104.
- 今井靖親 1980 文字指導の心理学的研究 保育学年報1980年版, フレーベル館, 187-198.
- 今井靖親 1983 仮名の読字学習に及ぼす絵画化と熟知化の効果 教育心理学研究, 31, 18-25.
- 今井靖親 1984 幼児の文の読解に及ぼす絵の効果 奈良教育大学教育研究所紀要, 20, 47-57.
- 今井靖親 1986 仮名の読字学習に及ぼす絵の対提示と単語の熟知度の効果 読書科学, 30, 1-9.
- 今井靖親・今井道子 1983 a 幼児における片仮名の読みと学習難易度要因の検討 奈良文化女子短期大学  
紀要, 14, 126-134.
- 今井靖親・今井道子 1983 b 幼児の読字力と文理解 日本保育学会第36回大会研究論文集, 93-94.
- 今井靖親・斎藤道代 1988 幼児の文理解における絵の対提示の効果 奈良教育大学紀要, 37, 91-101.
- 神戸市立教育研究所 1973 幼・小教育の連けいに関する研究Ⅲ——幼児の読む（ひらがな）能力の発達と  
家庭における指導の実態——研究報告, 130, 255-306.
- 国立国語研究所 1972 幼児の読み書き能力 東京 東京書籍
- 久原恵子・井上尚美・波多野誼余夫 1974 批判的思考と読解過程——(2)読解と批判的思考能力——日本教  
育心理学会第16回総会発表論文集, 420-421.
- 村田孝次 1972 幼稚園期の言語発達 東京 培風館
- Rusted, J., & Coltheart, M. 1979 Facilitation of children's prose recall by the presence of picture. *Memory &  
Cognition*, 7, 354-359.
- Samuels, S. J. 1976 Attentional process in reading: The effect of picture on the acquisition of reading response.  
*Journal of Educational Psychology*, 58, 337-342.
- 佐藤公代 1979 幼児の思考の発達に関する研究——子どもの絵本理解における挿絵の役割——愛媛大学教  
育学部紀要第Ⅰ部教育科学, 25, 115-124.
- 佐藤公代 1980 幼児の思考の発達に関する研究——幼児の絵本理解における挿絵の役割についての再吟味  
——愛媛大学教育学部紀要第Ⅰ部教育科学, 26, 105-114.
- 杉村健 1974 幼児における単語の読みの学習 教育心理学研究, 22, 34-38.
- 高木和子・丸野俊一 1979 幼児の物語理解に及ぼす先行情報の質的效果 教育心理学研究, 27, 238-243.
- 高木和子・沢田瑞也・小林幸子・田代康子 1975 絵本の読み聞かせに関する研究(1)——くり返し読み聞か  
せによる分析——読書科学, 70, 105-113.
- 高橋登・杉岡津岐子 1988 テレビ漫画材料とした物語理解の発達の研究 教育心理学研究, 36, 135-143.
- 内田伸子 1975 幼児における物語の記憶と理解におよぼす外言化・内言化経験の効果 教育心理学研究,  
23, 87-96.

幼少年教育研究所 1973 幼児・児童読書力テストの手引 金子書房

〔付記〕 本論文の作成にあたり、実験に快く御協力くださいました精華聖マリア幼稚園（竹田マリ子園長）の先生と園児の皆様に厚く感謝します。

## The Effects of Reading Method and Picture on Young Children's Sentence Comprehension

Yasuchika IMAI and Toshie NAKAMURA

*(Department of Psychology, Nara University of Education, Nara 630, Japan)*

(Received April 28, 1989)

The purpose of this investigation was to examine the effects of oral and audience reading and pictures on young children's comprehension for sentences of the picture book.

The subjects were 72 five year-old children in kindergarten. They were assigned to one of the following four groups: ①audience reading-picture, ②audience reading-no picture, ③oral reading-picture, ④oral reading-no picture.

As a material a picture book titled "A black horse Blanky" was used. and the sentences of the book were read orally by experimenter and were recorded by a tape recorder.

In the study trials each subject of the group ①was showed a picture book and listened to the audience reading of the sentences through the tape recorder. Each subject of the group ②was showed a book without picture and listened to the tape recorder. In the group ③, each subject was presented a picture book and read orally the sentences of each page by self. In the group ④, each subject was presented a book without picture and read orally the sentences of each page.

After the study trials all the subjects were asked about the content of the book to test their sentence comprehension.

The main findings were as follows:

- (1) The subjects who listened to the audience reading of the sentences got higher scores than the subjects who read orally the sentences by themselves.
- (2) The subjects who were showed the picture book got higher scores than the subjects who were presented the book without picture.

These results suggested that the audience reading of the sentences and the pictures presented in the book provided much verbal and visual information and had more facilitation effects on young children's comprehension for sentences or the story of the picture book.